

浄土

monthly JODO

2019
23

February
March



副会長

追悼 佐藤成順師「得蓮社定譽上人 大智弘律成順大和尚」



佐藤成順師は去んぬる平成三十年十二月十四日、部内寺院先住通夜に参列された極寒の帰り道、持病であった動脈瘤が破裂、突然のご遷化を遂げられました。世壽は八十六歳でございました。

師は品川願行寺第二十九世住職、大正大学名誉教授、文学博士。昨年六月より当会副会長をおつとめいただきました。

日本印度学佛教学会や、道教学会で評議員をお勤めになるばかりでなく、仏教史学会、日本中国学会等で活躍され、宋代の中国佛教の泰斗として唯一無二の方でした。

また、当会発足に尽力された三佐藤（佐藤

密雄師・佐藤良智師・佐藤賢順師）のお一人、佐藤賢順師のご子息として、法然上人鑽仰運動を引き継がれ、当会の発展のために惜しむことなく力を注いでいただきました。

十二月二十五日、増上寺におきまして表葬儀が行われました。御導師は当会前会長であり、大本山清浄華院御法主真野龍海大僧正がお勤めになりました。

（主な著書）

『三国仏教史』浄土宗教学院・『法然』中央公論社・『中国佛教思想史の研究』山喜房・『宋代佛教の研究』山喜房・『善導の宗教』浄土宗など

佐藤成順上人

追悼

『浄土』

アーカイブ

平成16年9月号より

此岸への
愛着
彼岸への
思慕

文学博士

佐藤成順

始皇帝の限りなき此岸への愛着

中国を統一した秦の始皇帝は、偉業を達成し絶大な権勢の座に就くと、自分の寿命が永遠であることを願った。天下を平定した二年後、山東省方面に巡遊したとき、この地の徐市（徐福ともいう）という人が書を奉り、「東海に三つの神山があり、そこには遷人（仙人）が住んでいます。つきましては、齋戒して身を清め、男女の童とともにそこを訪ねて、仙人を求めたい」と始皇帝に援助を願った。始皇帝はそれを許可し、徐市に、男女の童数千人をつれて東海に船出し仙人を求めさせた。仙人が見つかれば不老不死の術や薬が手に入ると思ったからであろう。山東半島海滨地方では古くから神仙思想がさかんであった。半島から東方の海を見ているうちに、海のかなたに神仙の世界がありそうな気になってきたのであろう。

この四年後、始皇帝は、碣石山（地名は確定できないが山東半島より北の渤海湾を望む海滨のどこか）に巡遊したとき、秦に滅ぼされた燕の国の盧生という方士と出会った。盧生は、始皇帝に、海のかなたに羨門・高誓（羨門・高誓ともいう）という仙人がいると話したのであろう。始皇帝は盧生にこの仙人を探させた。また韓終候の公石生に命じて碣石山の頂上に行き仙人の不死の薬を求めさせた。

始皇帝の神仙への関心、不老不死への探求は、その後、再び皇帝の前に現れた盧生の進言でさらに強くなった。

臣（盧生）たちは、芝草（長寿に効果のある植物）や奇薬や仙人を求めています、いつも見つけることが出来ません。これは誰かが妨害しているからと思われまふ。方

術に、「人主は時どき微行（他人に隠れた行動）して、悪鬼をしりぞけよ。悪鬼がしりぞけば真人^{しんじん}が至る」とあります。人主の居場所を臣下が知れば、（君臣の俗情が邪魔して）神気を害します。神人は水に入っても濡れず、火に入っても焼けず、運氣をしのいで、天地とともに長久であります。今、上様におかれましては、天下を統一されたものの、無欲恬淡の域には到達しておられません。どうか上様がどの宮殿においてもなるかを、人に知らせてはなりません。そうすれば不死の薬を手に入れることができますよう。

この、でたらめとも思える盧生の話を、すっかり信じた始皇帝は、真人を慕い、それ以来、皇帝の自称である「朕^{わが}」を止めて、自ら「真人」と称した。そして悪鬼をさけるべく宮殿の改修を実行した。まず都の咸陽城の周囲二百里以内の宮殿や楼閣二七〇を外部から見えない通路でつなぎ、帳帷や鐘鼓や美女などをそれぞれの建物の中に配置し、各々の所在を登録して移動できないようにした。こうして皇帝が宮殿内のどこにいるかわからなくした。また皇帝の外出に際し、その居場所を喋った者は死刑、という厳しい法令を下した。事実、始皇帝が梁山宮に行幸したときのこと、始皇帝が山上にいと、下に、丞相の乗った馬車が多数の供回りの衆を従えて通って行くのが見えた。皇帝の口から、「臣下のくせに行列が多すぎるな」と独り言が出た。その言葉をそばで聞いた宦官の一人が、丞相にそつと告げた。それで丞相は、以後、行列の供回りを少なくした。宦官の誰かが自分の居場所を丞相に喋ったわけである。始皇帝は激怒した。容疑者を次々取り調べたが、誰も罪を白状しない。そこで、あのととき山上で皇帝の近くにいた者を全員捕らえてことごとく処刑した。

このように、始皇帝の不老不死への欲求は異常なまでになった。盧生も始皇帝がこゝまで自分の話を信じるとは予想していなかったに違いない。とまどい、結果を考えると恐ろしくなったのであろう。ついに逃亡を決意する。盧生は同僚の方士の候生とともに始皇帝を非難し、「權勢を貪ることだけに終始しているから、仙薬を得ることができないのだ」と、逃亡を正当化して、始皇帝の前から姿を消した。

それを知った始皇帝は激怒するという。「徐市は巨万の経費を費やしたけれども、いまだに仙薬を手にいれない、盧生は、手厚く処遇したにもかかわらず、こともあろうに自分の悪口を吹聴し逐電した」と。この怒りが当時の学者に対する強い不信感を招いた。帝は、役人に学者を取り調べさせ、奇怪なことを言つて人民を惑わしている、という噂のある学者四六〇人あまりを捕らえて穴埋めにしてしまった。世に言う「坑儒」である。坑儒は焚書（書物を焼く）とともに始皇帝の暴挙として著名である。この坑儒の断行の裏には、盧生らの裏切りに対する激怒があつた。それは、始皇帝の狂氣的な現世への執着がもたらしたわけである。

始皇帝は、これで不老不死の道を諦めたように見えるが、まだ完全に捨ててはいなかった。始皇帝にとつて死の旅路となつた巡幸のおり、再度訪れた山東半島の地で、徐市を捜させた。徐市は始皇帝の前に連れてこられた。徐市はかつて始皇帝に仙薬のことを説き、仙人を求めて東海の島に船出した。あれから一〇年も過ぎているのに、多大な費用をつかつているのに、まだ仙人も仙薬もみつかつていない。徐市は処罰されるのを恐れ、「蓬萊山の神仙の薬を手に入れることは可能です。しかし、途中に大鯨がいるので蓬萊山まで行き着けません。どうか弓の名手を同道させ、大鯨がでたら射殺してください」と口からで

ためを言った。

そこで、始皇帝は、船員に大魚を捕らえる道具を携行させ、自らも連発式の石弓を持参し船出した。やがて、巨魚があらわれたので見事に射殺した。これで邪魔者は除かれよい結果が訪れよう、始皇帝はそう信じたに違いない。しかし、このときすでに始皇帝は病魔に侵されていた。

病は急速に重くなった。沙丘平原（河北省平原郷付近）に來たとき、ついに崩御した。随行の重臣たちはその死をすぐに公表できなかった。独裁皇帝の旅先での死は、政情の不安を齎らすし、また重臣たちの権力争いの思惑があったからである、始皇帝の亡骸はひそかに都まで運ばれた。おりしも七月、暑い盛りで遺体は腐敗し始め、ひどい悪臭を發した。そこでやむをえず皇帝の詔と称して、塩漬けの腐った魚を車に載せ、魚の臭気で屍骸の臭気をまぎらわした。こうして都に到着し皇帝の喪が公表された。

天下を平定し、絶大の権力と財を手に入れると、不老不死への願いが強くなり、その探求に異常ともいえる行動をとった。自分の意のままになる此岸に限りない魅力と執着を持った。けれども、その永生への願望は達せられず、五十歳の短い生涯だった。しかもその遺骸は腐敗し悪臭を放つ、という悲惨なありさまであった。（『史記』卷六・始皇帝本紀による）

彼岸への思慕

無常の理に基づく仏教では、人は、生まれてくれば老いがあり病があり死があり、この生・老・病・死の四つは避けることができない人間のもっとも大きな苦しみであると説く。

そしてこの苦しみから救われる方法を説く。また、われわれが生存する国土とは異なる地獄や天人の国土や仏の国土があり、人は死後、行いによりいずれかの世界に生まれる、と死後の世界、来世を説く。目にみえない世界、超経験的な世界を思索した古代インド人の宇宙観である。

われわれの住む国土、すなわち此岸は、迷いの世界、凡夫の世界である。彼岸は、さとの境地、仏の世界であり、極楽浄土でもある。

こうした無常観や他界観・来世観などを説く仏教は、始皇帝の時代にはまだ中国に伝わっていなかった。始皇帝の歿後二〇〇年余り経て仏教が中国に伝わると、この信仰は人々の心に大きな変革をもたらした。死後の世界、来世や彼岸の存在を信じ、自分や肉親がそこに再生することを願い心の安穩を得た。しかし、それと並行して、一方では、此岸尊重の不老不死の探求は、道教の中心思想となつて、広い階層の間で信仰されている。

人は誰でも彼岸に魅力を感じ、精一杯生きようと努力する。始皇帝ほどではないが、普通の人はならば此岸に愛着を持つ。彼岸と此岸は正反対であるが、此岸に愛着し、彼岸を思慕するのが、歴史上でも今日でも、大方の人間の生き方であろう。春秋年二回の彼岸会は、唐の善導大師の著『観経疏』かんきやうしよ定善義じやうぜんぎに、春分と秋分には太陽が極楽浄土のある真西に沈むから、日没の処を観じて極楽浄土を思念せよ、という一文に由来するともいわれる。しかし彼岸会の仏事はインドや中国では行われず、日本だけのようである。その理由はわからないが、それだけに日本の仏教徒にとって大切な行事である。彼岸会は、凡夫が此岸で清浄な彼岸の世界を思慕し、彼岸を思慕することによって、此岸の生活に新たな生き方を発見する機会である。

浄土

2019/2・3月号 目次

比岸への愛着・彼岸への思慕	佐藤成順	1
目次		7
法然上人と親鸞聖人	林田康順	8
連載 微風吹動	工藤量導	14
連載小説 渡辺海旭 ⁹⁵	前田和男	18
法然上人とお弟子たち	石丸晶子	24
連載 マンガ さっちゃんはネツ	かまちよしろう	31
編集後記		32
表3 貧乏骨董	三宅政吉	



表紙題字＝中村康隆元浄土門主

表紙写真＝鬼海弘雄

アートディレクション＝近藤十四郎

協力＝迦陵頻伽舎

法然上人 と 親鸞聖人

〔連載十九〕

親鸞聖人が捉えた
阿弥陀仏と極樂浄土①

林田 康順

(大正大学教授)

『教行信証』教・行・信・証・方便化真土文類の巻

前回、親鸞聖人の主著『教行信証』の教巻・行巻・信巻・証巻の説示内容の詮要が、『大無量寿経』の「教」説であり、その説示に基づいた名号功德としての大「行」であり、弥陀回向としての大「信」であり、往生成仏という「証」果であることを述べました。また、第十九願（『観無量寿経』に説示される双樹林下往生、方便要門）から第二十願（『阿弥陀経』に説示される難思往生、方便真門）へ、さらに第十八願（『大無量寿経』に説示される難思議往生、弘願）へと衆生の信仰が進んでいくさまを三願転人と呼ぶことを紹介しました。その中、『観無量寿経』と『阿弥陀経』所説の阿弥陀仏と極樂浄土については、『教行信証』方便化身土文類の巻に明らかにされていきました。そして、こうした親鸞聖人の教説の組み立て方は、師法然上人の教えに見ることができないばかりか、大きく異なること

を指摘しました。それでは、親鸞聖人は、真実の仏と浄土をいつたいどのように捉えておられたのでしょうか。

『教行信証』真仏土文類の巻

『教行信証』全六巻の内、残る一卷が真仏土文類の巻であり、そこには親鸞聖人にとっての真実の阿弥陀仏と極楽浄土が明らかにされています。本巻の冒頭には次のようにあります。

『教行信証』真仏土文類第五 標挙の文「光明無量の願 寿命無量の願」（真宗聖典三三六）

（試訳）成仏したならば、自身の光明の輝きには際限がなく、無数の仏の国土を照らすことができるようになりたいという誓願（第十二願）。成仏したならば、自身の寿命の長さに際限がなく、その限界を設定できないようにしたい、という誓願（第十三願）。

この標挙の文に続いて次の一節があります。

つつしんで真仏土を案ずれば、仏はすなはちこれ不可思議光如来なり、土はまたこれ無量光明土なり。しかればすなはち大悲の誓願に酬報するがゆゑに、真の報仏土といふなり。すでにして願います、すなはち光明・寿命の願（第十二・十三願）これなり。（真宗聖典三三七）

（試訳）つつしんで、真実の仏と浄土について考えを巡らせると、仏は思い量ることのできない光明を具えた如来であり、浄土はまた量り知ることのできない光明の世界

です。すなわち、法蔵菩薩が立てられた大いなる慈悲の誓願の報いとして成し遂げられたものですから、真実の報仏・報土というのです。それらの誓願とは、すなわち光明無量の願（第十二願）と寿命無量の願（第十三願）に他なりません。）

このように親鸞聖人は、真実の仏と浄土は第十二・光明無量の願と第十三・寿命無量の願によってもたらされた報仏・報土であると述べられます。とりわけ親鸞聖人は、それらを「不可思議光如来」「無量光明土」と表記していることから、光明無量を前面に押し出した仏・仏土であると認識していることが伺えます。

さらに親鸞聖人は、真仏土文類の末尾に次のように述べられます。

願海について真あり仮あり。ここをもつてまた仏土について真あり仮あり。選択本願の正因によりて、真仏土を成就せり。真仏といふは、『大経』（上）には「無辺光仏・無碍光仏」とのたまへり。また「諸仏中の王なり、光明中の極尊なり」（大阿弥陀経・上）とのたまへり。以上。『論』（浄土論）には「婦命尽十方無碍光如来」といへり。真土といふは、『大経』には「無量光明土」（平等覚経・一）とのたまへり。あるいは「諸智土」（如来会・上）とのたまへり。以上。『論』には「究竟して虚空のごとし、広大にして辺際なし」といふなり。（真宗聖典三七一―三七二）

（試訳）阿弥陀仏の誓願には真実と方便の願があります。ですからその果報としての仏土についても真実と方便の浄土があるのです。選択された本願を正しい原因として、真実の仏と浄土が完成しています。真実の仏とは、『大無量寿経』には「行き届かないことはない無辺光の仏、遮られることはない無碍光の仏」と述べられ、また『大阿弥陀経』には「諸仏の中の王であり、すべての光明の中でもっとも尊い」と説かれ、

世親菩薩の『往生論』には「尽十方無碍光如来に帰命する」と言われています。真実の浄土とは、『平等覚経』には「無量光明土」と述べられ、あるいは『無量寿如来会』には「多くの智慧を具えた仏土」と説かれています。『往生論』には「この上なく勝れていることは虚空のようであり、広大で窮まることがない」と言われています。）

このように親鸞聖人は、真実の仏と浄土について多くの経論を引用して明らかにしています。そして、ここでも「無碍光仏」「無碍光仏」「光明中の極尊」「帰命尽十方無碍光如来」あるいは「無量光明土」といった一節を経論から引用しているように、真実の仏と浄土について、やはり光明無量を強調していることが分かります。

阿弥陀仏は光明なり、光明は智慧のかたちなり

ところで『教行信証』真仏土文類には、次の一節があります。

またのたまはく（涅槃経・四依品）、「光明は不羸劣ふるいれつに名づく。不羸劣とは名づけて如来といふ。また光明は名づけて智慧とす」と。以上。（真宗聖典三四三）

（試訳 また『涅槃経』には「光明とは決して衰えることがないものに名づけられる。決して衰えることがないので、如来と名づけられる。また光明は智慧と名づけられる」と説かれています。）

このように親鸞聖人は、光明と如来と智慧を等しいものと規定する『涅槃経』の所説を引用されます。こうした関係性を基本として親鸞聖人は、『唯信鈔文意』において、阿弥陀仏の実体を求めて、次のようにその理解を展開されるのです。

「涅槃」をば滅度といふ、無為といふ、安楽といふ、常楽といふ、実相といふ、法身

といふ、法性といふ、真如といふ、一如といふ、仏性といふ。仏性すなはち如来なり。この如来、微塵世界にみちみちたまへり、すなはち一切群生海の心なり。この心に誓願を信樂するがゆゑに、この信心すなはち仏性なり、仏性すなはち法性なり、法性すなはち法身なり。法身はいろもなし、かたちもまします。しかれば、ころもよばれず、ことばもたえたり。この一如よりかたちをあらはして、方便法身と申す御すがたをしめして、法蔵比丘となりのたまひて、不可思議の大誓願をおこしてあらはれたまふ御かたちをば、世親菩薩（天親）は「尽十方無碍光如来」となづけたてまつりたまへり。この如来を報身と申す、誓願の業因に報ひたまへるゆゑに報身如来と申すなり。報と申すはたねにむくひたるなり。この報身より応・化等の無量無數の身をあらはして、微塵世界に無碍の智慧光を放たしめたまふゆゑに尽十方無碍光仏と申すひかりにて、かたちもまします。いろもまします。無明の闇をはらひ、惡業にさへられず、このゆゑに無碍光と申すなり。無碍はさはりなしと申す。しかれば阿弥陀仏は光明なり、光明は智慧のかたちなりとするべし。（真宗聖典七〇九―七一〇）

（試訳）「涅槃」のことを滅度といい、無為といい、安樂といい、常樂といい、実相といい、法身といい、法性といい、真如といい、一如といい、仏性といひます。仏性とは如来のことです。この如来は、無數の世界に満ち満ちておられます。すなわち、すべての命あるものの心に他なりません。この心の内に誓願を信じ願うのですから、この信心は仏性であり、仏性は法性であり、法性は法身なのです。その法身は色もなく、形ありません。ですから、心にも思い巡らすことができず、言葉にも言い表すことができません。この一如の世界から形を現して方便法身というお姿を示し、法蔵菩薩

と名乗られて、私達の思議を遙かに超えた大いなる誓願を立てられた結果、現れて下さったお姿を、世親菩薩は「尽十方無礙光如来」と名づけられたのです。この如来を報身といいます。誓願という原因に報いて如来となられたので報身如来と申し上げるのです。「報」とは、原因が結果として現れたということです。この報身から応身や化身などの無数の仏身を現出して、そこから無数の世界に何物にも決して妨げられない智慧の光を放って下さるので「尽十方無礙光如来」といいます。その光には形もななく色もありません。この光は無明の闇を払い除き、悪業に妨げられることもありません。ですから、「無礙光」というのです。「無礙」とは、障りがないということです。従って阿弥陀仏は光明であり、その光明は智慧の姿であると理解すべきです。

一読してお分かりのように正確な理解がとても困難な説示ですが、次のように整理できそうです。すなわち、親鸞聖人にとっては、「いろもなし」かたちもましまさず「こころもおよばれず」ことばもたえ」た「法身」真如」などから、「かたちをあらはし」た「方便法身」こそ「尽十方無碍光如来」「報身」としての「阿弥陀仏」に他ならないのです。言ってみれば、「浄土三部経」に説示される法蔵説話、つまり、法蔵菩薩が五劫思惟の結果、兆載永劫の修行を経て、十劫前に成仏されたという阿弥陀仏は、あくまでも「法身」が仮に姿を現された「方便」としての「法身」に過ぎないということです。そして、究極的には、その「阿弥陀仏」の「御すがた」「御かたち」とは、実は「光明」であり、「智慧のかたち」であるということです。このように親鸞聖人にとっての真実の仏・仏土とは、どこまでも私たち衆生が想念できる「いろ」や「かたち」あるいは「こころ」や「ことば」の滅した「光明」そのものであることが知られるのです。

（続く）

工 藤 量 導



微

風

吹

動

風は他者からの贈り物

やわらかい風が ふくらみかけてる
言い伝う文が ほころびだしている

(タテタカコ「イキモノたち」収録曲より)

風はどうして吹くのか？ 幼いころに誰しも一度は抱えたことのある疑問だと思う。ちなみに、学研サイエンスキッズのウェブサイトに「科学なぜなぜ110番」では次のような答えが示されている。

かんたんにいえば、風というのは空気の移動です。わたしたちの住む地球は空気におおわれています。その空気は目に見えませんが、形はありませんが、温度が上がるとふくらみ、反対に温度が下がると、ちぢむという性質をもっています。太陽に照らされてあたためられふくらんだ空気は、軽くなって上昇します。反対に空の上のほうで冷やされてちぢんだ空気は、重くなって下降するのです。そうなると、上昇した空気のあとには、まわりから別の空気が流れこんできます。また、下降した空気のあとにも、まわりから別の空気が流れこんでくるのです。このような空気の動きが、風として感じられるというわけです。

今でこそ、風の正体は「空気の移動」で、それは温度や気圧の差異によって生じ、地球の自転の影響なども受けていると説明される。では、科学的な知見が前提になかったころ、昔の人びとは一体どうやって風が吹くと考えていたのだろうか。

右の解説で注意を引いたのは、空気が「ふくらむ」「ちぢむ」という語感のおもしろさだ。そこから連想したのが風神さん。俵屋宗

達が描いた有名な風神雷神図では、筋骨隆々の風神さんが大きな袋を両腕にたずさえて力強く握りしめている。この風袋を一杯にふくらませて、それを一気にちぢませることで、袋内の体積を変化させて空気の流れを生み出しているわけだ。仕組みとしては金属の精錬に使われる鞆（ふいご）とよばれる送風装置やアコーディオンなどの楽器も同様だという。風神については古くは妖怪とする説があり、口からビューッと風を吹き出すユニークな姿も描かれている。つまり、擬人化されているとはいえ、風は誰か「他者」が起こしてくれている。そんな豊かな想像力が源にあったのだろう。現代人としてはそのクリエイティブさがちょっと羨ましくもある。

ところで、気持ちのよい涼風のことを、極楽浄土がある西の方角から吹く「極楽の余り風」と言ったりする。さながら、歌手のコンサート会場の外で希少な音漏れの恩恵にあずかっている感じだろうか。では肝心のホールの中ではどんな音が吹き鳴らされている？

仏典によれば、極楽に吹く風は、速度や温度のあんばいが絶妙で、肌触りも最高に心地よく、日夜吹くべきタイミングを見はからって、あらゆる方角から季節を越えていつでもそよいでいる。その風が宝珠や楽器で飾られた樹々の間を走り抜け、みやびで多重音の絶妙なハーモニーを奏でて世界の片隅まで響きわたり、それを聞き届けた

住人たちは確固たる思いを胸に仏の道を歩み出すことができるという。風は音を吹き鳴らし、香りを運び、華を舞い散らせ、鳥が囀りを添え、楽器もひとりでに唄い出す中で、真理の教えを伝えて、眼耳鼻舌身意の感覚器官に澄みわたらせる。まさに花鳥風月の粹を極めた総合芸術のそり踏みだ。

さて、極楽の風はどうやって吹くのか。それは仏典に明言されていない。それでもきつと「誰か」が願いを込めて、これから歩み出す人のために起こしてくれている。そんな風に想像してみたい。その「誰か」のありったけの想いを託されてふくらんだ風袋は、身をよじらせておもむろに息吹きを送り出し、私たちの心を篤く励まし、憂いや虚ろな気持ちこそと吹き飛ばしてくれているのだ。

風が他者からの贈り物だと思えば世界の彩りはもつと鮮やかに違いない。だってこの世界は縁が織りなす巡り逢いの集合体、どこかで通じ合っているのだから。人生の意味なんて本当のところは誰にも分からないけれど、私たちの頬をなでる風のやさしい手触り、淡い匂いは確かにそこにあり、ささやかに寄り添ってくれている。

南無阿弥陀仏。私たちの希いのたねが遥かに届いて、西の彼方でやわらかな空気がふくらみかけている。新しい風が生まれる希望という名の蕾（つぼみ）がほころび、芽吹きの時を迎えている。

小説 快僧渡辺海旭

壺中に月を求めて

前田和男

第九十五回

第三部

充実と稔りの白秋へ

米高騰と宗教大学生その二



宗大生の壮挙に称賛の声

渡辺海旭が住職をつとめる西光寺の寄宿生、長谷川良信たち宗教大学生らが始めた米価高騰に苦しむ「細民」への外米格安販売は大きな社会的な反響をよんだ。

ちなみに「読売新聞」（明治四十五年七月十九日付け）には、「仏教学生の活動 新宿と伝通院で外米販売」の見出しとともに、次のように報じられた。

「巢鴨庚申塚なる浄土宗宗教大学学生中二十余名は先頃米価騰貴の結果細民の窮状見るに忍びずと為し、親しく其の実情を調査研究の上、恰も例年の通り本月十七日より向う四十五日間小石川伝通院に於て加行執行するにつき、仏教学生として聊かたりとも細民の困難を救ふを得ば、これ實際上の修行なりと既に去十三、十四の両日第一回外米元価販売を試み、頗る好結果を収めたるにぞ。一同は大

に勇気を加へ、更に同情券を発して僧俗有志の慈善心に訴へ、又帰省せる同窓学生等は其れぞれ地方を遊説して資金の調達に奔走せるが、同調者もなかなか多く、昨日迄寄付金額は八十余円に達したるに依り愈第二回販売を行ふ筈にて、即ち十八、十九両日は午後六時より八時半まで新宿大宗寺（閻魔）に於て、又来る二十、二十一の両日は同時刻に小石川表町伝通院に於て販売するに決し、学生等は日中修行の余暇を利用して資金の募集は勿論、外米問屋との買入交渉より広告運搬其他の準備に忙はしく、第二回分六斗七升人特等蘭貢米六十袋を買入れたるが、元価は一升二十錢なるを凡て十六錢にて一人五合以上三升を限りて販売する由なり」（原文には句読点がないが、読みやすさに配慮して適宜句読点を入れた。筆者）

記事前段にある「加行」とは、宗教大学の学生が一学期の仕上げとして、小石川の伝通

院で一か月半にわたって行なわれる僧侶としての修養のことである。

記事では、細民救済こそ修養の本意であることに気づいた学生たちが、「加行」終了後、夏季休暇を活用して準備をし、余暇活動の一環として外米販売により細民救済を行なったことが、これぞ「仏教学生の鑑」と称賛されている。

悪徳便乗商法も

いっぽうで、巷では、とんでもない「便乗商法」が横行していた。

下谷区入谷では、「精神舎」なるまことしやかな団体が立ち上げられ、細民救済の目的で炊き立ての飯一人前に副食物付き三銭で販売。事前の広告効果もあって、大盛況となるも、そのうち細民から「あれは陸軍の残飯に下等な外米を炊いて混和したもの。副食物も苦い沢庵三切れ。食べたら嘔吐、あるいは頭痛下痢をきたした」との噂がたち、「細民救

済を口実にした商法ではあるまいか」と心ある人々の顰蹙を買ったという。

そんな「便乗商法」が横行するなかで、「元価」が一升二十銭の外米を二割引きの十六銭で格安販売、それに宗門の有力寺院から寄付された「阿伽陀薬」などの妙薬を「おまけ」につけるといって、一所懸命さと初々しさがいつそうニュース価値を高めたのであろう、前掲の「読売新聞」以外の新聞も、これをこぞって「天下の美談」として報じたのである。

これに大いに励まされたのは長谷川良信ら海旭の教え子たちだけではない。師として彼らにヒントを与えた海旭も、また、足長おじさん〴〵を買ってでた宗門中枢も、大いに面目をほどこし、安堵とともに誇らしく思ったとしても当然であった。

ところが、たった一紙だけ、それも有力な言論紙の「論説」に、海旭と宗門の面目と安堵と誇りはあえなく打ち砕かれたのである。

米価の昂騰は殆ど空前の記録を示して民に菜色あり、野に飢餓がひう満つ（略）我國の上下は今や悉く窮民の救済を以て其の念としつゝ、あるなり、然るに底事なにごとぞ平常口に慈悲を説き、博愛を叫びつゝ、ある日本の僧侶階級は恬然として見て見ざる風を粧ひ、手を供こまねて愕腹の窮民を見殺しにしつゝ、あり（略）

この後、浄土宗が「貪欲無慈悲」の「例外」として挙げられ、海旭は安堵しかけたが、それは束の間でしかなかった。

「僅かに浄土宗が外米の廉売を行ひ、救世軍が多少の救済事業に従事するを除いては十五万の僧侶は固く財囊の口を閉づると共に、他の同情を喚起すべき説法の口をも閉じ、黙々として死せる者の如く然り（略）」

「例外」とされた「浄土宗が外米の廉売」とはもちろん宗大生の「壮拳」のことだが、しかしそれで宗門が「免罪」されたわけではなかった。記事の筆鋒はさらに鋭さをます。

「彼等の生活は現時の我国情に照して遙かに贅沢に、遙かに分不相応に、遙かに貪婪に、少なくとも東西本願寺、曹洞宗、浄土宗の如きは其の威勢古の王侯の如く、一たび教書をその末寺と信徒とに下せば、十万二十万の黄

金は数日にして集め得べきを疑わず。彼等が去る四十三年より四十四年に亘り宗祖の遠忌を営まんが為に全国の信徒より募りたる黄金は約千五百万以上二千万に上ると云ふに非ずや。而して其の募財の方法に至りては殆ど寄付行為に非ざる誅求を信徒末寺に強ひる事実さえ少からざるなり」

なんのことはない、「貪欲無慈悲」の「典型的事例」として槍玉に挙げられたのは、海旭もかわつた「法然上人七百年遠忌事業」であつた。そして、最後の最後にこう断罪されるのである。

「されど既に僧侶と云へる一階級を占め、虚実何れにあれ慈悲博愛を口にするとせば現時の如き悲惨なる時代に於て多少の救済事業を試むるを以て義務とせよ。然らずんば彼らは永しえに社会的階級の基礎を失ひ、終に葬りさらるゝに至らんは必せり」

この萬朝報の「社説」の激越さに、海旭も宗門中樞も大いに驚かされた。いや、驚きというよりも、一読した瞬間、反発をおぼえた。他の仏教宗派と比べても、いや「慈善活動」に熱心なキリスト教団と比べても、わが教え子たちが立派な活動をしており、世間もそれを高く評価しているというのに、なぜなのだと。

思いもよらないケンカを売られて宗門幹部は面食らったようだが、海旭は、じきに「論説」と冷静に向き合った。そして、「反発」よりもむしろ「自戒」として受け止めるべきだと思いなおした。

たしかに「教え子」たちは「善行」をなしたが、彼らの「親」や「師」たちは萬朝報が断じているように、他の仏教僧侶と似たりよったりの「貪欲無慈悲」であることは否定できなかった。

すなわち、親が善行を積んで子どもに範を

示すのが親としての「筋」であり、子どもの善行で親の不善を相殺しようとするのは、恥とすべきである。したがって、子どもが褒められて喜んでいる場合ではない。

海旭はそう痛感すると、主筆をつとめる「浄土教報」の巻頭でこう「自戒」をつよく促したのである。

「宗教大学生の熱烈なる活動に對しては、江湖の同情翕然として集り、同情称讃の声諸新聞の筆に上る。而も時孟蘭盆の忙時に属するとは云へ、都門濟々の伝道隊員が、之を對岸の火災視し、毫も援護を与ふるなきが如きは、果して伝道隊員の真義なるや否や、吾人は隊員諸氏が何れの場合に於ても今少しく敏活熱誠ならむことを希望せざるを得ず」(「浄土教報」一〇一七号、明治四十五年七月二十二日)

(つづく)

平成三十年六月二十二日 於増上寺慈雲閣

法然上人鑽仰会 主催●平成三十年

石丸晶子氏講演概録

法然上人と

お弟子たち (三)

いしまる あきこ 1935年東京都生まれ。国文学者、文芸評論家。東京大学文学部卒、同大学院人文科学研究所博士課程修了。東京経済大学名誉教授。著書に『面影びとは法然―式子内親王伝』（朝日新聞社）、『歴史に咲いた女たち―源氏の花 平家の花』（廣済堂出版）、『法然の手紙』（人文書院）、『お手紙からみる法然さま』、小説『月影の使者』（上・下）（浄土宗出版）ほか多数。

法然上人の直弟子と呼ばれる人たちは、何人いたでしょうか。

一一九八年、この頃、都で大流行したのが天然痘、瘡病（むしやま）、現在のマラリアと思われるが、上人は生死の境をさまよう重病に罹られます。死を覚悟した上人は、わたしが死んだあと、弟子たちはどのようにすればいいかということをしたためました。現在浄土宗で「没後遺誠文」と言われるものを執筆されます。それを見ると、当時法然上人の草庵に上人と同居していた人は僅か七人です。信空、感西、証空、円親、長尊、感聖、良清でありました。この人たちは多年入室、常随給仕の者と言われています。

このほかに遵西、直念、欽西など、「年来には非ずと雖も止住する同法者」、つまり十年、十五年と同居しているわけではないけれども、半年、一年、知恩院あたりの草庵に留まっている者が十人から二十人ぐらいました。

また「没後遺誠文」にこう書かれています。「東西に往還して求道聞法に日を送る聖たち」、つまり聖集団がこの頃多数現れ、彼らは法然上人と直弟子を中心にした第一次の浄土宗集団に対して、第二次の教化者となって、全国に散らばっていききました。

この人たちについて法然上人はこう記しています。「西来東来、有問法門、西去東去、不知行方、朝来暮往之人甚多」。つまり、いろいろな人たちが法然上人のところに来て、教えを聞いてはまた去っていった、ということですね。

そして、一二〇〇年前後の頃、法然上人と直弟子七人、あるいは十人前後を中核にして、その周辺に念仏同法者が拡散的に広がる念仏教団が形成されてい

きました。

そして、念仏上人のような全国に散らばっている聖集団が、それこそ「西来東来、有間法門、西去東去、不知行方」という人たちが、それぞれ自分のお弟子さんたちを持ち、お弟子さんがさらに孫弟子を持つというように、細胞分裂的にあつと言う間に、法然上人が生存中に浄土宗の教えは広がってゆきます。

浄土宗の第二祖と言われる弁長という方が書き記した書物に「我も我もと上人御房のみ弟子と名のりて、日本五畿内七道に念仏の義を申し候人雲霞うんかの如く幾百万々として念仏の義を申し候」とあるそうです。この当時の一大社会現象になっていたということがわかります。

天台座主慈円の『愚管抄』、藤原定家の日記『明月記』などにも、この念仏宗が繁盛に繁盛を重ねていると書かれています。

こうして日本中を揺るがして、法然上人の在世中にも浄土宗は大流行したということは、一般市民にあつと言う間に広まってきましたので、いろいろな誤解も生まれました。それさえ唱えれば極楽往生間違いないということで、南無阿弥陀仏を唱えれば犯罪を犯しても赦されるそうだから、南無阿弥陀仏を一生に一回唱えればいいのか、いろいろな間違った教えが下々では伝わることになったのです。

そういう人たちは、日本全国、津々浦々、雲霞のごとくいて一大社会現象になったそうです。宮中も幕府も取り締まりに大騒ぎになるわけです。

法然上人は「一念義」というものが、つまり一回念仏を唱えれば、罪を犯し

でも、何をして、南無阿弥陀仏さえ唱えれば皆、OKだという間違った教えがまことしやかに下々のほうに広まると、その都度、きびしく戒める文章を書き残しています。そして、比叡山や何かから専修の浄土宗の輩を取り締まってほしいという強訴が、朝廷にたびたび持ち込まれたということは、それだけ浄土の教えが津々浦々に広がっていたことの証でもあるでしょう。

さて、そういう時代を揺るがした法然上人という人、現在、浄土宗、浄土真宗という日本仏教を代表する大きな仏教教団の始祖である法然上人はどういう人でしょうか。

法然様のお手紙をよんでまず感じることは、念仏による一切衆生救済の真理を概念的、理論的には説いておられないことです。シンボルとか譬え話を^た用いて、ひたすら浄土の教えが万民に対して開かれた救済の教えであると説いておられることです。

これは、法然上人と親鸞聖人の大きな違いだと思います。法然上人はその教えを誰にでもわかりやすい譬え話、シンボルによってお説きになります。親鸞聖人の特に『教行信証』は、非常に概念的で、譬え話をほとんど用いません。

私は、宗教的真理は比喩や象徴によって初めて明らかにされると 생각합니다。聖書ではイエス・キリストは世の初めから人間に隠されている真理を、譬え話によらずには何も語らなかつたと記しています。

このことは法然上人においても同様でした。どういう譬えを話しておられるかと言いますと、例えば、『往生浄土用心』では、「世間にあつても他力という

ことはありましょう。足腰が不自由な者が遠い道を歩こうとするときは、舟や車に乗って簡単にいくことを考えるものです。物詣をするとき、足の速い人はすぐにも参りつくところへ、足の遅い人は一日かけてもなかなか行き着かないものですが、それでもお参りしたい心さえあれば、ついには行き着きます。そのように、願う心さえあれば年月とともに信心も深まっていけるに違いありません」

さらに、このようにもおっしゃっています。この「御消息」は、そのときの摂政関白であった公卿筆頭の、九条兼実の正室、北政所に宛てたのではないかと言われています。とにかく赤裸々な心で、真心を持って念仏、阿弥陀の慈悲にすがることが大事だとおっしゃっています。

法然様は人間を知っている方だなあとつくづく思います。例えば、こんな人がいるとお手紙の中でおっしゃっています。名利を振り捨てたことを非常な誇りとしている者。また仏道に励んでもあれこれ心を動かし、一つの道に分け入ろうとしない者、また最初に出会った物を最上とし、その後いかなる道理を耳にしても初めに出会った道への執心を捨てない者、今日は熱心な信心を起こして道に進むかに見えていたのに、明日はもうそれを忘れてうち捨ててしまふ者もいます、と。

さらに、北条政子への返書には、舟や筏が破れると航海できないように、我々は戒を守ることができないために生死の大海を渡っていく方法を持っておりません。この俗界に住む者が浄土を求めるのは、弓無くして空の鳥をとり、足な

くして高い梢に咲く花を手折ろうとするようなものです、と。

このように、とてもわかりやすく教えを説いておられるわけです。

さてこの法然上人のお手紙からどんなお姿が浮かんでくるかと申しますと、筆跡は非常に知的で、気品に満ちて勁いものがあります。達筆です。抽象的、一般的、理論的なことを言うのではなく、その人その人に即して具体的に教え導いておられる。それが非常に印象に残ります。

その人の立場に立って話す。例えば、熊谷直実への手紙では、熊谷次郎直実が自分の母親について書いてきた返事に、法然上人は、親に対する孝行を一般論として親は大事にしななければいけませんよと言うのではなくて、熊谷直実の母親は確かこのとき、八十九歳だったと思います。お母さんはもう八十九にもおなりのはずで、今年、来年あたりはお迎えが来るのではないかと思っておられるかもしれない。従って母親の不安を和らげ、お念仏を唱えるようにしてあげてくださいというように八十九歳の母親の身になって、非常に具体的にまごころを込めて指導しておられます。

また、承如法（式子内親王）へのお返事には、この式子内親王が臨終のとき、法然上人にもう一度お目にかかりたいという懇願を出すのですけれども、上人は行きませんでした。そのときのお返事に、危篤状態にある内親王に念仏を勧めるだけではなく、お念仏しなさい、ではないのです。どう説いておられるか。「常に御目をふたぎ、掌を合わせ、御心を鎮めて祈ってください。願わくは阿弥陀仏の本願あやまたず、臨終の時かならず我前に姿を現し慈悲を加え助けて、

古き伝統技

三代にわたる信頼

浄土宗法衣専門

有限
会社

古島法衣店

〒111東京都台東区元浅草4の2の1
電話(03)384211289
振替0018002145231

我を正念に住せしめ給えとお心でも願ひ、口に出しても称えてください」と、非常に具体的なのです。

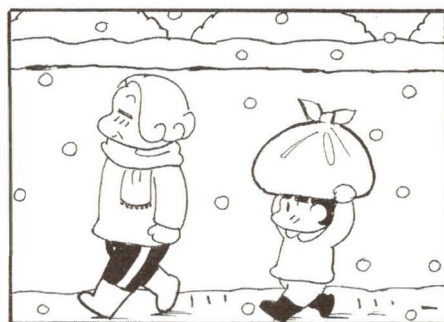
津戸三郎へのお返事。津戸三郎は鎌倉幕府に仕える武士でしたが、彼が袈裟とお数珠を欲しいと法然上人におねだりしてきた願ひのお返事に、「あえて新品ではなく、わたくしが日頃掛けている袈裟と日頃所持している念珠をお送りしました」と書いてあります。

この津戸三郎にとって、どんなに嬉しかったでしょう。新品ではなく、敬慕してやまない、聖者と仰ぐ上人の日頃掛けている数珠や袈裟をいただいたのですから。

(つづく)

さっちゃんね

かまちよろう



かまちよろう先生作新聞四コマ漫画『ゴンちゃん』が各地方新聞に掲載されています。(京都新聞・静岡新聞・山梨日日新聞・北日本新聞・福島民報・宮崎日日新聞・新日本海新聞・神戸新聞・岐阜新聞・中国新聞・四国新聞・徳島新聞)

編集後記

空高く何も見えない二月なり

岱潤

今年私は高齢者の仲間入りをする。自分では全くその自覚がないのだが、時間は容赦がない。朝日新聞が昨年の暮れから一月八日まで、「エイジンググニッポン」という九回の連載を行った。今の日本で、人口減少と少子高齢化は逃れようもない現実だ。昨年日本の人口は四五万人減っている。全人口の真ん中が六五年には二十七歳だったものが、二〇五〇年には十五歳にまでなるといふ。当然消滅地域は増える。しかし人工知能(AI)は、このまま都市集中が進めば、我々の生活は持続困難になるというシナリオを画い

ている。九回の連載は人々の思考が変わり、終身雇用も永住も過去のものとなり、この国の形が替わり、公の仕事に就く人が減り、地方議員の激減を歎いて終わる。AIの叡智が人間の叡智を越えて行く転換点のことを、「シンギュラリティ」といふ。孫正義氏はその転換点こそ人類最大の「革命」になるといふ。ある学者はそれを二〇二四年とも予測している。朝日の連載は「AIロボットを一人一台持つ日が来る」という話を紹介している。そしてその特性から、力仕事ではなく、事務方、管理者になることを予想している。

今年、元号が替わる。ただ昭和から平

成に替わるときと違い、今度はお祝い事になる。平成天皇の勇氣と配慮に今さらながら感服する。明るい展望はそれくらいかもしれない。(長)

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤
斎藤晃道
佐山哲郎
青木照憲
村田洋一

浄土

八十五巻 二三月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成三十一年一月二十日

発行 平成三十一年二月一日

発行人

佐藤良純
加藤昌康

編集人 株式会社 晩印刷

印刷所 株式会社 晩印刷

〒一〇五・〇〇一一
東京都港区豊公園四・七 四明照会館四階

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三(三)五七八六九四七

FAX 〇三(三)五七八七〇三六

振替 〇〇一八〇・八・八二八七

雑誌『浄土』
特別、維持、賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
巖谷勝正(目黒・祐天寺)
魚尾孝久(三島・願成寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
加藤昌康(下北沢・森巖寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
桑原勇慈(甲府・瑞泉寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(両館・称名寺)
高口恭典(大阪・一心寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
成田昌憲(世田谷・大吉寺)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓文(静岡・華陽院)
本多義敬(両国・回向院)
松溝泰彦(芝・寶松院)
真野龍海(芝・天光院)
水科善隆(長野・寛慶寺)

(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://jodo.ne.jp/>
メールアドレス hounen@jodo.ne.jp

貧乏董

三宅政吉

グラフィック・デザイナー



この護符の版木はどこで手に入れたのだったか。たしか東京・原宿のけやき通りの骨董市だったような気がするが、記憶は曖昧である。値段も私が見えるほどだから、高くても千円くらいだったか。

どこの寺から出たものか、いつ頃のものか業者に見せたのだが、寺の名前はわからないが、たぶん百年ほど前のものだろうと言う。ずいぶんといいかげんな話である。

同じ業者が扱っていた虫封じの護符の版木もあったが、ふたつ買う余裕もなく、こちらを選んだ。虫封じの版木よりも、こちらのほうが複雑な板面だという単純な理由からだ。無理してでもふたつ買っておけばよかった。貧乏人は後悔ばかりしている。

中央に彫られているのは「妙法蓮華経善星守」の八文字。上部の左右の文字は「二大」とも読めるが、もしかしたら装飾なのかもしれない。

「妙法蓮華経善星守」とは妙法蓮華経と唱えることで、



版木の天地は108ミリ、左右37ミリ、厚みは20ミリ。下はフロッタージュで浮かび上がった文字。

善き星を招くお守りということだろうか。

墨で黒光りし、角がすり減ったこの版木は小さいながら、なかなかの迫力がある。

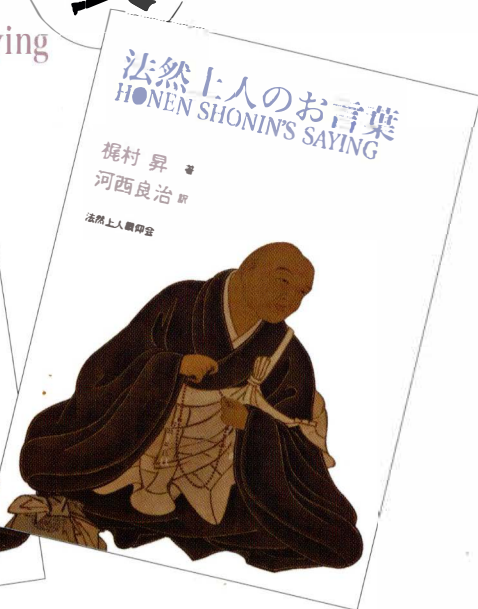
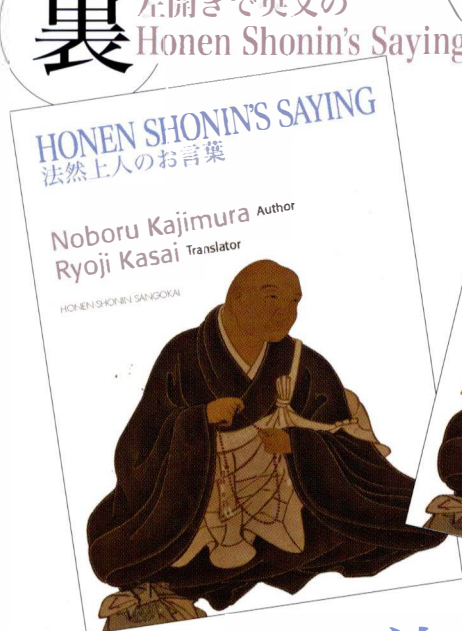
帰宅して墨を塗って擦ってみたのだがうまくいかない。墨よりももっと粘着力のある塗料がいいのかもしれないが、あいにくそんなものは手元にない。ふと思いついて、薄い紙をあてて上から柔らかな鉛筆で擦ってみた。いわゆるフロッタージュの技法である。それが下の写真だが、読みやすいように左右反転している。

善星守とは善星皆来の意味であろう。対になるのは悪星退散か。善い星の下で生きることができますようにと、この護符を身につける、あるいは家内に貼っておくのだろうか。庶民の祈りと切ない願いが込められた札を刷っていた版木である。おろそかにはできない。どう取り扱ったらいいのか、困ったものである。好奇心に駆られて、滅多なものを買うものではないと後悔している。

月刊**浄土**の連載が
単行本になりました。

裏 左開きで英文の
Honen Shonin's Saying

表 右開きで和文の
ご法語



和英対応**法然上人のお言葉**

梶村 昇・著 河西良治・訳

ご法語と解説が和文と英文で一冊になりました。

外国の方のお土産にも最適です。A5判・124ページ 頒価 1,000円（税別）

電子書籍は下記 QR コードよりご購入いただけます。

日本語版 (Japanese)

英語版 (English)

日本語版 (Japanese)

英語版 (English)

HONTO



AMAZON



法然上人鑽仰会だから
こそ作れる
オリジナル単行本です。

法然上人鑽仰会 FAX : 03-3578-7036

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4明照会館4階

※お問い合わせは、Fax またはメール

hounen@jodo.ne.jp へお願いします。